世紀末覇王とライバルたち

テイエムオペラオー伝説

小川隆行
ウマフリ

好敵手たちとの熱き戦い

年間無敗8戦8勝
古馬GI5勝

〈特別インタビュー〉
全レース騎乗
和田竜二騎手
“オペラオーから
一生の宿題をもらった”

絶対王者と世代の輝きがここに!

テイエムオペラオー伝説

世紀末覇王とライバルたち

小川隆行＋ウマフリ

星海社

236

SEIKAISHA SHINSHO

はじめに

無敗三冠馬シンボリルドルフ以来、史上2頭目のGⅠ7勝を挙げた名馬テイエムオペラオー。ルドルフと異なりクラシック勝利は皐月賞のみだったが、古馬になりGⅠを6勝。ルドルフが達成できなかった秋古馬GⅠ三冠（天皇賞・ジャパンC・有馬記念）を成し遂げた。

秋古馬GⅠ三冠馬には2億円（内国産限定。外国産馬は1億円）のボーナスが支給される。達成したのはテイエムオペラオーとゼンノロブロイの2頭のみだ。

秋古馬GⅠ三冠の達成は非常に難しい。激戦のため疲労も重なり、また調整も難しくなる。距離やコースも異なるため完璧な強さが必要となる。近年は10月初旬の凱旋門賞を目標とする強豪馬も多くなるなど日程的な難しさも存在する。

さて、秋古馬GⅠ三冠馬であるテイエムオペラオーの評価は、あまり高くはない。

オペラオー以降、5頭の馬がGⅠ7勝以上を達成した。

史上最強馬ディープインパクト。

64年ぶりの牝馬ダービー馬ウオッカ。

ジャパンC連覇達成のジェンティルドンナ。
稀代のスタミナホース・キタサンブラック。
GⅠ9勝を挙げた牝馬三冠馬アーモンドアイ。
これらの名馬に比べ、オペラオーは地味に見えてしまうのだ。2着がほとんど同じ馬、つまり強敵を倒していない点が、地味にうつる最大の要因だろう。
オペラオーは多くの個人馬主に希望を与えてくれた馬だった。セリでの取引価格はわずか1千万円。億単位が当たり前のセレクトセールと比べて超がつくほど格安の馬が、稼いだ賞金は18億円。これは中小牧場に希望を与えた。
オペラオーが走った当時はサンデーサイレンス産駒の全盛期。「サンデーにあらずんば馬にあらず」と言っても過言ではない状況において、サンデー産駒の名馬と激戦を繰り広げた。
管理する岩元市三師、騎乗した和田竜二騎手、そして所有者の竹園正繼(たけぞのまさつぐ)氏と、オペラオーの関係者は人情味にあふれている。ビジネスライクではない点が近年の競馬との最大の違いだろう。
もう一つ、勝ち方に派手さがないのも地味に見える要因だ。
後方一気のディープインパクト、大きな完歩で東京GⅠを制したウオッカ、先輩三冠馬オルフェーヴルを競り負かしたジェンティルドンナ、秋の天皇賞で瞬間移動を決めたキタサン

ブラック、世界レコード達成のアーモンドアイに比べ、レコードもなければ着差もわずかだが、これもまたオペラオーの長所である。

ディープインパクト以降、凱旋門賞やドバイ、香港を中心とした海外GⅠレース挑戦が主流となった。キタサンブラック以外の4頭はいずれも出走して注目を集めたが、海外挑戦が主流ではなかった時代に生を受けたのも、地味さと無関係ではない。

血統はお世辞にも一流とは言い難く、また騎手も厩舎もリーディング上位ではなかった。そうした環境から超一流となったテイエムオペラオーの物語は、多くの人に何かしらの希望をもたらすはずだ。

小川隆行

目次

はじめに 3

プロローグ
テイエムオペラオーが起こした奇跡 12

競馬note 1 重賞を制覇した「テイエム」の競走馬たち 20

第1章
テイエムオペラオー 10番勝負 21

1999年
毎日杯
ようやく間に合った
前哨戦で2着に4馬身差圧勝！ 22

1999年
皐月賞
外から強烈な追い込みを見せ
クラシック初戦を制する 28

1999年
日本ダービー
ライバル2頭に競り負ける
人馬ともに悔しい敗戦 34

1999年
菊花賞
三冠最終戦で
三強が三度目の激突 40

1999年
ステイヤーズS　有馬記念
古馬GI級に肉薄し
世代最強を証明した 46

2000年
京都記念　阪神大賞典
ミレニアム全勝へ
ライバルに植えつけた絶望感 52

2000年
天皇賞・春
ライバルたちの包囲網
すべてを退け、王座獲得 58

2000年 **宝塚記念**
奇襲に動じぬ信じる心
円熟味増す、名タッグ 64

2000年 **京都大賞典 天皇賞・秋 ジャパンC**
ジンクス打破！
忍び寄る新たなライバル 70

2000年 **有馬記念**
年内全勝、絶体絶命！
それでも王者は自ら道を拓く 76

コラム1 **オペラオーの種牡馬時代**
重厚なヨーロッパ型の血統が
高速化する馬場に対応できなかった!? 86

第2章 **直接対決した同世代のライバルたち** 89

メイショウドトウ
「オペラオーさえいなければ…」
立ち向かい敗れ続けた最強ライバル 90

ナリタトップロード
対オペラオー2勝12敗
脳裏に刻まれる菊花賞制覇 96

アドマイヤベガ
記録上は「ダービー連覇」の栄光
その背景にあった、天才の苦悩 102

ラスカルスズカ
偉大なる兄とわんぱくな弟
遅れてきた、覇王へのチャレンジャー 108

トゥザヴィクトリー
ドバイの砂上に橋頭堡を築き上げ
悶えの果てに淀でその名を体現す　112

ホットシークレット
去勢後にみせた驚異のスタミナ
抽せん馬史上最高の獲得賞金馬　116

ロサード
重賞5勝はすべて平坦コース
オペラオー世代の個性的な小柄馬　120

オースミブライト
8歳までターフを駆けたタフネス
中距離で輝いた小さな名脇役　124

ペインテドブラック
単勝1・1倍の断然人気馬を破った
ステイヤーズSの「一瞬の輝き」　128

コラム2　一人の騎手が乗りつづけた名馬
昔は負け続けても乗せてもらえたが、
今は一度のミスで降ろされる　130

競馬note 2　実力があっても難しい　重賞連勝記録　134

第3章　**ミレニアムを駆けた99世代**　135

アドマイヤコジーン
2歳王者が6歳で挙げたGI2勝目
やさしい鞍上・後藤浩輝がこぼした涙　136

サウスヴィグラス
引退後も存在感抜群
名種牡馬の尻上がりな現役時代　140

トロットスター
遅咲きの「スター」が成し遂げた
春秋スプリントGI連覇の大偉業　144

トウカイポイント
1000m～2600mの勝利馬がみせた
6歳時マイルCSでのGI初勝利　148

ノボトゥルー
走りぬいた11年間
88戦13万６４８０ｍの道のり 152

マグナーテン
セン馬の格を一段上げた名脇役
遅咲きの良血馬は距離万能の無事是名馬 156

スティンガー
重賞５勝の名牝がみせた
パドックでの「覇気の落差」 160

ウメノファイバー
鞍上が選んだ作戦は末脚温存
秘策で『壁』を乗り越え樫の女王へ 164

プリモディーネ
夢にまで見たガッツポーズ
忘れられぬ、一流の末脚 166

フサイチエアデール
常に第一線で上位を賑わせた名牝
念願のＧＩ制覇は孝行息子が成就 168

ベラミロード
ミスターピンク内田利雄騎手と
各地を駆け巡った宇都宮の女傑 171

ブゼンキャンドル
世代の中でも異彩を放つ秋華賞馬
古き良き時代の残り香とともに 172

トーホウエンペラー
東北の皇帝が君臨
砂上の覇者が世紀末に見参 174

オリオンザサンクス
早田秀治騎手とともに逃げて、
南関・夜空に輝いたオリオン座 176

ハルウララ
実はオペラオーと同い年
日本中を熱狂させた負け組の星 178

コラム3 海外のミレニアム世代
JCに参戦したり、
種牡馬として輸入されたり、
日本でもおなじみの名馬が目白押し 180

第4章 オペラオーが挑んだ異世代の名馬たち 183

ステイゴールド
遥か旅程の果て黄金は燦然と輝き
その血は三千の新たな物語を紡ぐ 184

スペシャルウィーク
95年生まれの総大将が抱いた矜持
ライバルと守り切った最後の牙城 188

グラスワンダー
囁かれた「3歳の年度代表馬」
出走制限に阻まれたGⅠ4勝馬 192

アグネスデジタル
輝いて見えた驚異的なパドック
好結果となった「外国産馬の登録」 196

ジャングルポケット
東京2400mでGⅠ勝のコース巧者
アグネスタキオンとのライバル物語 200

マンハッタンカフェ
テイエムオペラオー最後の一戦
立ちはだかったのは夏の上がり馬 204

特別インタビュー 和田竜二騎手（JRA）
オペラオーから一生の宿題をもらった
年間8戦8勝、うちGⅠ5勝という
空前絶後の記録はいかにして作られたか？ 208

テイエムオペラオー世代・全重賞勝ち馬データ 219

おわりに 235

執筆者紹介 238

本書における競走馬の年齢表記は、特に断りがない限り、その時代の表記としています。各馬のデータは2022年9月末日現在のものです。

写真　フォト・チェスナット

プロローグ

テイエムオペラオーが起こした奇跡

伝説となった有馬記念（2000年）

人馬の絆

人は生きる中で、自らが想像したよりも、遥かに大きなものを失うことがある。

時にそれを、悲劇と呼んだりもする。

キーストンという名の、サラブレッドがいた。第32代日本ダービー馬という栄誉以上に、生涯最後の出走となったレースでの姿が、人々の心を揺さぶり続ける。１９６７年当時は12月に３１００ｍで施行されていた阪神大賞典に、６歳だったキーストンは主戦であった山本正司騎手と出走した。道中からリードを奪い軽快に逃げたキーストンは、先頭のまま最後の直線を向いた。

しかしその刹那、キーストンの左前脚が揺れた。

前のめりに転倒するキーストンと、ターフに投げ出される山本騎手。必死に立ち上がろうともがく、キーストン。彼は、自らの身体に起きた異変を、その帰結を、どれほど理解していたのだろう。やがて、キーストンは立ち上がった。揺れる左前脚は地につけることができず、宙に浮いていた。その想像を絶する痛みの中で、キーストンが気遣ったのは、己の身体ではなく、数多のレースをともに走った山本騎手の容態だった。キーストンは、微動だにしない山本騎手のもとに、よろめきながらも一歩、また一歩と近づいていった。すぐそばまで歩み寄ったキーストンは、山本騎手を起こそうとその鼻面をこすりつけた。左前脚は揺れ、

三本の脚で踏ん張りながら。それにより意識を取り戻した山本騎手は、なんとか膝立ちになって、キーストンの顔を抱きしめた。それは、キーストンの最期の姿だった。

３００年以上もの途方もない時間をかけて、より速く走るために、淘汰と改良を繰り返してきたサラブレッド。人を背に乗せて疾駆するその姿は、観る者の心に情緒と情熱を宿す。しかし、速く走ることに極限まで特化したサラブレッドの四本の脚は、ガラスのように繊細で、そして脆い。すべてのサラブレッドにとってその脚は、自らの命と同義である。それは、美しさが残酷さの際にあることと、よく似ている。

揺れる三本の脚で鞍上を探した、キーストン。あるいは、テンポイント。サクラスターオー。ワンダーパヒューム。ライスシャワー。サイレンススズカ。ホクトベガ。シゲルスダチ。シングンマイケル…数多の優駿たちが、天寿を全うすることなく、今生に別れを告げてきた。時を重ねるほどに、無事にレースを走り終えることが、いかに難しいことかを痛感する。そして、その悲劇で失われたものの大きさと、悲しみの深さに、私たちはいつも慄(おのの)くばかりだ。

悲劇は、人の心を揺り動かす。しかし、悲劇自体が人を惹きつけるわけではない。悲劇が否応なく浮き上がらせる「絆」に、人はその心を動かすのだ。なぜならば、喪失や別離の悲しみを癒すのもまた、「絆」であることを、人は知っているからだ。「絆」とは、誰かのために生きる者たちの間に芽生える、一つの奇跡である。揺れる脚で鞍上を気遣ったキーストン、

そしてその鼻面を抱きしめた山本騎手。彼らの間にあったものを「絆」と呼ぶ以外に、何と呼ぶことができようか。そして、「絆」とは、悲劇の中にだけ宿るものではない。

人は生きる中で、自らが望むよりも、遥かに大きなものを受けとることがある。

時にそれを、喜劇と呼んだりもする。

テイエムオペラオーという名の、サラブレッドがいた

皐月賞をはじめとしたＧⅠを、７勝。なかでも20世紀最後の年を、８戦して無敗で駆け抜けた。前人未到の古馬ＧⅠを年間５勝、そしてＧⅡを３勝。ステップレースを使わずに本番に直行するローテーション、あるいは適性を見極め、出走レースを絞ることの増えた昨今から見ると、常識外の走りである。東京、中山、京都、阪神。どの競馬場でも、どの馬場でも、どの距離でも、テイエムオペラオーにはおかまいなしだった。派手な勝ち方はなく、最後の最後にわずかに前に出ているその走りは、かのシンザンの賢さに似ているとも称された。

喜劇は、時に人を退屈にさせる。しかし、それは私たちがよく陥る、大いなる勘違いだ。２０００年当時の日本競馬において、テイエムオペラオーとその陣営は、特別な光を帯びていた。年間不敗、ＧⅠ５勝。誰もがそうなればと願いながらも、そんなことは不可能だと頭を振るような、そんな景色。そんな眩（まばゆ）い光のなかを、テイエムオペラオー陣営は駆け抜けた。

望み続ければ、諦めなければ、続けていれば、生きていれば。どこかで望むべくもない喜劇に、巡り合うことがある。そんな単純な真実を、競馬を愛する人たちに、示してくれた。

おそらくは、その「絆」のどこかに、ほんの小さな綻びがあっても、テイエムオペラオーの奇跡は起きなかった。それは、神の恩寵とでもいうべきものを信じたくなるような、そんな「絆」である。生産者である杵臼牧場、その初代が急逝した後を継いだ、鎌田信一氏。彼を支えた、布施正調教師と武田作十郎調教師の縁。布施調教師の引退後、それを引き継いだ岩元市三調教師。岩元師と同時期に、同じ鹿児島県垂水市に生を受けた、竹園正繼オーナー。そして、テイエムオペラオーの生涯全戦においてバトンを託された、和田竜二騎手。

すべてが順風満帆であったはずもない。数えきれない困難と試練、失敗と葛藤、あるいは喪失や別離。そうした数多の悲劇を癒し、乗り越え、克服し、そして大いなる喜劇とすることができたのは、「誰かのために」生きた、彼らの「絆」があったからこそではないだろうか。

史上初めて、追加登録でのクラシック制覇。三強を形成した、同世代のライバルたちとの激突。ダービー、菊花賞での蹉跌（さてつ）、それによる鞍上の降板騒動。最強世代の2頭に迫った、有馬記念。ミレニアムにおける、年間不敗ロード。メイショウドトウと繰り広げた名勝負物語。歳下の世代へとバトンをつなぐ走り。20世紀末の日本競馬を彩った、走りである。

テイエムオペラオーが走った時代から20年以上が経ち、社会も競馬も大きく変わった。世

界のトップジョッキーの短期免許による来日、日常となった有力馬の乗り替わり。ステップレースを使わないローテーション。育成技術、調教技術の向上、あるいは外厩制度の整備。そこには、テイエムオペラオーの時代とは違う形の「絆」がある。そこに正誤善悪もない。ただ、時代がその形を選んだというだけだ。しかし、年間不敗、古馬GⅠ5勝。テイエムオペラオーが成し遂げた偉業と、それを生んだ「絆」は、いまだからこそ振り返る価値がある。

人の生のなかでは、悲劇も、喜劇も、糾(あざな)える縄のごとく絡み合っている。その悲劇を喜劇と変えることができるのは、「絆」の力だ。「絆」とは、誰かのために生きる者たちの間に生まれる、奇跡の呼び名である。誰かのために生きるとき、その生は輝きを帯びる。そしてその輝きは、多くの人の心に情熱の炎を灯す。

観る者の心を揺さぶった、あの00年の有馬記念。絶望の4コーナー最後方から、テイエムオペラオーと和田騎手を支えたものは、なんだったのか。テイエムオペラオーという、唯一無二の喜劇を支えたものは、なんだったのか。

その問いに、あなたなりの答えを見つけて頂けることを願い、本書のゲートを開きたい。

きっとそれは、今日この日を生きる、あなたの周りにもあるものだから。

（大嵜直人）

皐月賞（1999年）

重賞を制覇した
「テイエム」の競走馬たち

「テイエム」の由来は、オーナーの竹園正繼氏のイニシャルであるＴＭである。鹿児島県出身の竹園オーナーが馬主資格を取得したのは１９８７年のこと。90年には小倉3歳Ｓ（テイエムリズム）で早くも重賞初制覇を達成している。その際の鞍上は河内洋騎手だったが、オーナーにとって初のＧⅡ制覇となった京都記念（テイエムジャンボ）も、鞍上は河内洋騎手だった。

和田竜二騎手を起用して初めて重賞を制したのは、翌年の毎日杯（テイエムトップダン）。同じく97年にはテイエムオオアラシも活躍していて、条件戦から4連勝でカブトヤマ記念・福島記念を制し、有馬記念でも6着に食い込んでいる。99年皐月賞でＧⅠ初制覇をもたらすテイエムオペラオーの登場の前から、すでに重賞クラスの名馬を複数頭にわたって見出していた。同年にはテイエムトッキューと和田騎手のコンビでカブトヤマ記念（福島牝馬Ｓの前身レース）も制している。テイエムオペラオーが年間無敗を達成した00年にはテイエムオーシャンがデビュー。阪神3歳牝馬Ｓや桜花賞・秋華賞を制し最優秀2歳牝馬*、最優秀3歳牝馬を受賞している。同馬はデビューから引退まで本田優騎手が乗り続けた。こちらも人馬の絆を感じるコンビと言えるだろう。

＊翌年から現状の馬齢表記となったため、当時の正式表記は３歳

第1章 テイエムオペラオー 10番勝負

1999年 毎日杯 GⅢ

ようやく間に合った前哨戦で2着に5馬身差圧勝！

歴代の名馬を振り返ると、どの馬にも「モノが違う」とファンが衝撃を覚えたレースが存在する。

たとえばディープインパクトのデビュー2戦目、若駒ステークスはその一つだ。スタートから最後方を進み、先行する2頭が飛ばして向正面では10馬身以上の差がついた。このまま2頭が逃げ切るのではないか、と感じた次の瞬間、4コーナー手前で仕掛けたディープは外から1頭だけ次元の異なる脚をみせた。終わってみれば2着に5馬身差、3着とはさらに2馬身差。

そのレースぶりは正に異次元で、名馬が名馬となる以前のインパクトとしてはトップクラス。馬名の通り深い衝撃を感じさせた。

近年ではアーモンドアイのジャパンC（3歳時）もすごかった。古馬と初対戦の三冠牝馬はキセキやスワーヴリチャード、シュヴァルグラン、サトノダイヤモンド、サトノクラウン、

カプリ（愛国）といった6頭のＧＩ馬を相手にせず楽勝。勝ち時計2分20秒6は２４００ｍの世界レコード。前年の勝ちタイム（優勝馬シュヴァルグラン）より3秒以上速かった。

これほどの衝撃ではなかったが、テイエムオペラオーにも「強い」と感じさせたレースが存在する。デビュー5戦目の毎日杯だ。

逃げるサンキングラッドを交わしてハナに立ったバイオマスターの5番手を進み、4コーナーで内から外へ持ち出すと直線半ばから独走状態。2着馬タガノブライアンに4馬身の差をつけた。

後に和田騎手は「2着をもっとも離したレースだった」と語っており、管理する岩元師も「毎日杯の勝ちっぷりは内容がすごかった。かなりのレベルまで行くのではないかと感じた」と、その強さを振り返っている。

しかし、ファンの評価は決して高くはなかった。毎日杯の勝ち時計2分4秒1は、このレースが「ＧⅢ２０００ｍ」だった21年間で下から4番目の遅い決着。前年の優勝馬ミラクルタイムより3秒も遅かった。

加えて、毎日杯の出走馬はお世辞にもＧＩ級とは言い難かった。1番人気バイオマスター（9着）は朝日杯3着・アーリントンＣ2着馬。2番人気ビッグバイキング（7着）は東京スポーツ杯3歳Ｓの2着馬である。また出走14頭中、ノーザンファーム生産馬はマチカネキモ

ッタマ1頭のみだった。

皐月賞のステップレースは弥生賞とスプリングS、そして共同通信杯が王道路線であり、毎日杯は「残り1枠」を競う1勝馬&2勝馬のレース。重賞ウイナーの出走は極めて稀であり、少なくとも皐月賞の主役になる馬が使うステップではない。ちなみに皐月賞を制した毎日杯の優勝馬は、グレード制導入後オペラオーとアルアインの2頭のみだ。

07年より距離が1800mに縮まった毎日杯は、オペラオーが勝って以降、クロフネ・ダノンシャンティ（NHKマイルC）やキングカメハメハ・ディープスカイ（ともにNHKマイルC→日本ダービー）、キズナ（京都新聞杯→日本ダービー）、シャフリヤール（日本ダービー）など5月開催GIレースのステップに使われている。

オペラオーが毎日杯を皐月賞へのステップとしたのは、前年8月の新馬戦を2着後、軽い骨折が判明したため年内を休養したことでローテーションに狂いが生じたのが理由だった。骨折から復帰後のデビュー2戦目、4歳未勝利戦（1月16日）のダート1400mを4着。3戦目（2月6日）のダート1800mを勝って未勝利を脱出。続くゆきやなぎ賞で芝に戻り連勝した。

ゆきやなぎ賞の翌週は弥生賞。ゆきやなぎ賞を勝った時点で、陣営は3月後半の毎日杯を使うことを決めた。結果次第で皐月賞へ進むか否かを決めようとしたのである。

ディープインパクトのような強豪馬は新馬戦・特別戦・皐月賞トライアルとクラシックの王道を歩み、勝利を重ねるほど多くのファンがヒーロー扱いをする。

逆に、骨折でクラシック戦線がとん挫したオペラオーのようなタイプは「非王道路線」を歩まざるを得ない。毎日杯は「ようやく間に合った」レースであり、少なくともこの時点でＧＩ級とは見られておらず、穴馬的な評価だった。

前述のとおり毎日杯でオペラオーが突き放した着差は、オペラオー自身の実質的なトップだった。着差だけみると01年京都大賞典の5馬身差が最大だが、このレースでは1着入線のステイゴールドが斜行で失格しており、毎日杯こそオペラオーが後続をもっとも突き離したレース。他馬を問題にしない勝ち方だった。

オペラオーは決して無理をしないタイプだった。多くの関係者が賢かったと口を揃えている通り、勝利時は2着を突き離さない。あくまで想像だが「無理して勝つと疲れる」ことがわかっていたのかもしれない。また、常に一所懸命で真面目に走っていた点をみると、性格的に優等生タイプだったと想像できる。

オペラオー陣営は当初、皐月賞に間に合わないと判断、2回目のクラシック登録料3万円を払っていなかったが、毎日杯を勝ったことで追加登録料２００万円を支払い、皐月賞出走を決めている。

2着馬を突き離す独走状態。
後に最強馬の仲間入りをするなど、この時点では誰も想像できなかった。

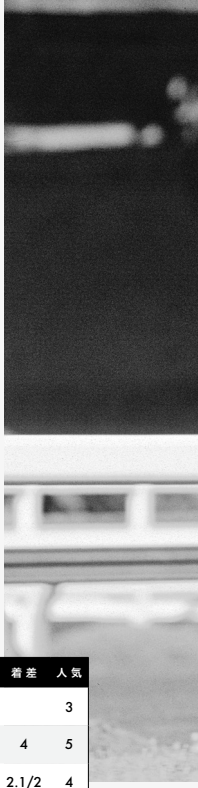
クロフネに次ぐ着差をみせた クラシック前哨戦

「毎日杯を優勝したのちのGI馬」の毎日杯における着差をみると、96年タイキフォーチュン1馬身1/4、01年クロフネが5馬身、04年キングカメハメハ2馬身半、08年ディープスカイ2馬身半、10年ダノンシャンティ1馬身1/4、13年キズナ3馬身、17年アルアイン半馬身、18年ブラストワンピース2馬身、21年シャフリヤールはクビ。オペラオーの能力の片鱗が垣間見えたレースだった。

1999年3月28日

第46回 毎日杯 GⅢ

阪神　芝右　2000m　4歳オープン　曇　良



レース結果

着順	枠番	馬番	馬名	性齢	斤量	騎手	タイム	着差	人気
1	1	1	テイエムオペラオー	牡4	55	和田竜二	02:04.1		3
2	4	5	タガノブライアン	牡4	55	藤田伸二	02:04.8	4	5
3	7	11	ブルーコマンダー	牡4	55	松永幹夫	02:05.2	2.1/2	4
4	2	2	マチカネキモッタマ	牡4	55	河内洋	02:05.2	アタマ	9
5	6	9	マイネルサクセス	牡4	55	本田優	02:05.3	1/2	8
6	7	12	マチカネテルテル	牡4	55	塩村克己	02:05.4	3/4	10
7	3	3	ビッグバイキング	牡4	55	武豊	02:05.4	ハナ	2
8	6	10	サウンドオブアース	牡4	55	飯田祐史	02:05.6	1	12
9	3	4	バイオマスター	牡4	56	田中勝春	02:05.7	3/4	1
10	5	7	バンダムフェザント	牡4	55	小池隆生	02:06.1	2.1/2	14
11	8	14	アストラルブレイズ	牡4	55	菅谷正巳	02:06.2	1/2	7
12	8	13	プロティウス	牡4	55	福永祐一	02:06.3	3/4	6
13	5	8	タイロバリー	牡4	55	石橋守	02:06.5	1.1/4	11
14	4	6	サンキングラッド	牡4	55	四位洋文	02:08.2	大	13

1999年 皐月賞 GI

外から強烈な追い込みを見せ クラシック初戦を制する

3連勝で毎日杯を制覇したテイエムオペラオーは皐月賞に挑んだ。

1番人気は弥生賞2着のアドマイヤベガ（単勝2・7倍）。弥生賞では前を行くナリタトップロードを追い込むも1馬身届かず2着だったが、メンバー中トップとなる上がり35秒0の末脚を使っており、トップロードを逆転するとみられていた。ここまで［2・1・0・1］という成績だったが、新馬戦（4着）は1位入線も進路妨害で失格。実質的に連対を外していなかったことが1番人気の要因となった。

父はサンデーサイレンス、生産はノーザンファーム、そして鞍上は武豊。1番人気になる要因が揃い過ぎていた。

2番人気は弥生賞を勝ったナリタトップロード（単勝3・3倍）。過去5戦で3着を外したことがなく「馬券になる確率はもっとも高い」とみられていた。若葉Sを制したマイネルプラチナムが3番人気だが、単勝オッズは2頭から大きく引き離されており、多くのファンが

2頭の一騎討ちを予測していた。

毎日杯を勝ったテイエムオペラオーは5番人気（単勝11・1倍）。前走の鮮やかな勝ち方はまるで評価されていなかった。同レース2着のタガノブライアンはダート戦で初勝利を挙げており「メンバーが弱かった」とみられたのも低評価の要因だった。

オペラオーの出現以前、毎日杯を勝った皐月賞馬は１９７７年のハードバージ1頭のみ。皐月賞出走を目標に毎日杯で目一杯に仕上げるため、皐月賞では余力が残らない。それが勝利に結びつかない一因だったが、このときのオペラオーは前走以上に元気であり、穴ムードも漂っていた。

「神経が過敏な馬だけに長距離輸送の影響が心配されたが、首から胸にかけてのたくましい筋肉をみる限り、それほど問題なかったようだ」とは直前の記者評価である。

ワンダーファングが出走を取り消し17頭立てとなったレースは17番人気アドマイヤラックがハナを切り、7番人気トウカイダンディー、11番人気マイネルシアター、14番人気マイネルタンゴらの人気薄勢が先団を形成。

人気馬は揃って中団より後ろに位置した。ナリタトップロードは内ラチ沿いで8番手、同馬をマークするようにアドマイヤベガ。オペラオーはさらに2馬身後方の外目に位置した。いつになく行きっぷりが悪いオペラオーだが鞍上の和田竜二は落ち着いており「直線で勝負

する」と末脚に賭けた。1番人気のアドマイヤベガが仕掛けると同時に同馬の左斜め後方から一番外を回ったが、このときアドマイヤベガに外に弾かれるとオペラオーのテンションが高まった。

「負けてたまるか！」――直線に入り先頭を走るオースミブライトが抜け出そうとした瞬間、内ラチより3頭分外からナリタトップロードが、同じく3頭分外からオペラオーが猛追する。それまでかなり外を回らされており、２０００ｍプラスアルファの距離を走りながら上がりタイムは35秒2（トップタイ）。オペラオーが内の2頭をわずかに交わした。

勝ちタイムは2分00秒7。5年前に三冠馬となったナリタブライアンが記録した1分59秒0より1秒7も遅かったが、直線で見せた瞬発力は1頭だけ次元が違っていた。

「一体どれほどの距離を走ったのだろう」と、レース映像を見直すといまだにビックリさせられる。「外からテイエムオペラオー」という実況が、その迫力を物語っている。

この勝利は和田騎手にとって待望のＧＩ初勝利となり、管理する岩元市三師にとっても初のビッグタイトル。生産した杵臼牧場にとっても初のクラシック制覇となり、中小牧場に夢を与えた。

馬主の竹園正繼氏にとっても初のクラシック優勝。わずか1千万円で取引された馬が追加登録料を支払ったクラシックを制したことで、個人馬主に大きな希望をもたらした。

強烈な追い込みを見せたオペラオーは4連勝を果たしクラシック初戦を手にしたが、この勝利からしばらく、勝ち星から遠ざかることとなる。後にGⅠ7勝を挙げる名馬となるが、皐月賞後は「荒れ馬場が向いた」「展開がはまった」など「ラッキーな勝利」と報じるマスコミも少なくなかった。

そうした評価を覆すのは古馬になってから。4歳時のオペラオーは5戦ほど勝利から遠ざかり、皐月賞以降、茨の道を歩まされてしまう。

数多くの試練を与えられることとなる和田騎手にとって、騎手としての成長の糧となる馬となるが、このときは試練が待ち受けるなど知る由もなかった。

1番人気アドマイヤベガは、弥生賞後に食欲不振に陥るなど体調がすぐれず、馬体重もマイナス12キロ。皐月賞を回避するプランもあったが、出走にこぎつけ3馬身以上離された6着。3着ナリタトップロードを含めた3頭が中心も、次走のダービーは混戦ムードとなっていった。

皐月賞後、〝競馬の神様〟大川慶次郎氏は「追加登録料を支払った馬がここまで走るとは驚きの一言。とはいえテイエムオペラオーは抜けて強いわけではなく全幅の信頼は置けない。安定感では一番強い競馬をしたナリタトップロードが上。馬体を立て直したアドマイヤベガも怖い」との評価を下していた。

若手ジョッキーが獲得した初GI勝利。
管理する岩元師（左から３人目）も初のビッグタイトルを手にした。

弱冠21歳で手にしたGI初優勝

和田騎手の初GI制覇は弱冠21歳。騎手のGI勝利を年齢順にみると、史上最年少が19歳7ヵ月の武豊騎手（88年菊花賞スーパークリーク）、2位が19歳8ヵ月の江田照男騎手（91年天皇賞・秋プレクラスニー）、3位が19歳11ヵ月の岸滋彦騎手（89年エリザベス女王杯サンドピアリス）。20歳未満での勝利はこの3人のみであり、20代での初勝利は一流騎手の証でもある。

1999年4月18日

第59回 皐月賞 GI

中山　芝右　2000m　4歳オープン　雨　良

レース結果

着順	枠番	馬番	馬名	性齢	斤量	騎手	タイム	着差	人気
1	6	12	テイエムオペラオー	牡4	57	和田竜二	02:00.7		5
2	6	11	オースミブライト	牡4	57	蛯名正義	02:00.7	クビ	6
3	4	8	ナリタトップロード	牡4	57	渡辺薫彦	02:00.7	ハナ	2
4	8	16	マイネルタンゴ	牡4	57	柴田善臣	02:00.9	1	14
5	3	5	マイネルシアター	牡4	57	江田照男	02:01.2	2	11
6	1	2	アドマイヤベガ	牡4	57	武豊	02:01.3	クビ	1
7	7	15	シルクガーディアン	牡4	57	横山典弘	02:01.3	アタマ	8
7	8	17	タイクラッシャー	牡4	57	松永幹夫	02:01.3	同着	12
9	8	18	マイネルプラチナム	牡4	57	木幡初広	02:01.4	1/2	3
10	4	7	ヤマニンアクロ	牡4	57	勝浦正樹	02:01.5	1/2	10
11	2	4	タイキヘラクレス	牡4	57	田中勝春	02:01.5	アタマ	16
12	5	10	ニシノセイリュウ	牡4	57	河内洋	02:01.8	1.3/4	4
13	7	13	ドラゴンブライアン	牡4	57	菊沢隆徳	02:01.9	3/4	9
14	3	6	トウカイダンディー	牡4	57	後藤浩輝	02:02.0	クビ	7
15	5	9	タガノブライアン	牡4	57	藤田伸二	02:02.1	3/4	15
16	7	14	カシマアルデル	牡4	57	的場均	02:02.1	ハナ	13
17	2	3	アドマイヤラック	牡4	57	岡部幸雄	02:05.8	大	17
除	1	1	ワンダーファング	牡4	57	幸英明			

〈特別インタビュー〉

和田竜二 騎手（JRA）

オペラオーから一生の宿題をもらった

年間8戦8勝、うちGⅠ5勝という空前絶後の記録はいかにして作られたか？

和田竜二（わだ・りゅうじ）

1977年、滋賀県生まれ。1996年に栗東・岩元市三厩舎の所属騎手としてデビューすると、一年目からステイヤーズSを制するなど活躍した。同期には福永祐一騎手や細江純子騎手など。若くしてテイエムオペラオーの主戦騎手として抜擢され、引退までコンビを組み続けた。写真は2018年宝塚記念で17年ぶりのGI勝利を遂げファンの声援に応える和田竜二騎手。

皐月賞制覇と勝ちきれない日々

年間8連勝。そのうちGⅠが5戦。すべて1番人気で勝利――。00年、23歳の若手騎手が、競馬界にその名を轟かせた。しかしそんな歴史的な快進撃の裏側には、ただならぬ苦悩とプレッシャーがあった。それをはねのけ偉業を達成したのが、和田竜二騎手である。

「デビュー前からすごく印象に残る馬だったかというと、そうでもないですね。ただ素質を見抜けなかっただけかもしれませんが…。おとなしくて良い馬だな、とは感じていました。その後、乗り込んでいくうちに良くなっていきましたね」

和田騎手は、年間無敗を貫いた相棒との出会いをそう振り返る。テイエムオペラオーと迎えたデビュー戦は98年8月。そこで2着に敗れたテイエムオペラオーはその後、骨折が発覚して休養を余儀無くされる。復帰後、ダート戦で勝ち上がりを果たしたテイエムオペラオーは、続くゆきやなぎ賞、毎日杯を連勝。特に重賞である毎日杯で2着に4馬身差をつけて快勝したことは、皐月賞に向けて大きな手応えとなったという。そこには、ひとつの根拠があった。

「97年にもテイエムトップダンで毎日杯を制して、皐月賞に挑戦していました。そこでは結果的に12着に敗れてしまったんですが、クラシックのレベルを肌で感じることができました。テイエムオペラオーはレース毎に馬が良くなっていましたし、毎日杯もあっさり制覇。そこから皐月賞前にはさらに状態が上向いたので、自分でも『ひょっとしたら』という気持ちはありました」

和田騎手はデビューから半年後にオールカマーで重賞を経験。同年にステイヤーズSで重賞初制覇を成し遂げると、年末には朝日杯3歳SでGⅠ初騎乗を達成する。いずれも、岩元調教師の管理馬でのチャレンジだった。

「（所属厩舎の）岩元先生が、若いうちから色々と経験させるように取り計らってくれたのが大きいです。関東にも遠征させてもらえましたし、中山競馬場での騎乗経験も積めていました。先生は、ご自身も現役ジョッキーの頃にはそうしてもらっていたから…と考えていたようですが、本当に有り難かったです。今の時代にはなかなかない手厚いバックアップをしてもらえました」

皐月賞では1番人気アドマイヤベガ、2番人気ナリタトップロードに対し、テイエムオペラオーは5番人気だったが、ゴール前の接戦をクビ差で制する。それまでの先行する競馬ではなく、あえて後方から差し切った。

「うまく乗れたとまでは思いませんが、皐月賞の勝ち方を意識した乗り方をしたつもりです。当時、その時期になると中山の馬場は悪くなる傾向にあったので、ビデオなどで研究しつつ対策を練りました。結局は馬に勝たせてもらったところが大きいですが、実は『デビュー4年目で早くもクラシックを勝てた』という気持ちよりは『ついに勝てた!』という気持ちの方が強かったかなと思います。前の週には同期の福永（騎手）がプリモディーネで桜花賞を制していましたし、古川（騎手）も97年にアインブライドでGⅠ制覇していましたし…。レース前から『次は俺の番だ!』と

意気込んでいました」

和田騎手の世代は『花の12期生』とも呼ばれる。競馬の解説者として活躍する細江純子元騎手など女性ジョッキーが3人いるという話題性に加え、平地・障害の両方でＧⅠを制した柴田大知騎手、騎手・調教師の両方で重賞を制した高橋亮調教師らもいた世代でもある。その世代で最初のダービー制覇なるかと挑んだダービーでは、3番人気3着と敗れた。

「ダービーは、そもそも自分が東京の２４００ｍ戦で勝てていないという不安要素がありましたが『二冠を目指せるのは自分だけだ』と、勝つつもりで挑みました。途中までは冷静に乗れていて、3コーナー過ぎまでは良い感じだったんですが、そこでつい動いてしまって…。あの極限状態で待てるか待てないかが、勝負の分かれ目でしたね。結果的には早仕掛けになってしまい、直線で差されてしまいました。やはり雰囲気に飲まれていたのかもしれません。終始レースを冷静に見ていた武豊さんがすごかったです」

ダービーで悔しい敗戦を喫した人馬だったが、夏を越して挑んだ京都大賞典でも3着に敗れ、クラシック最終戦の菊花賞でも2着に敗北。続くステイヤーズＳでも単勝1・1倍の圧倒的な支持を受けつつ2着に敗れた。好走はしながらもなかなか勝ちきれず、苦しい時期が続いた。

「仕掛けを待てなかったダービーとは逆に、菊花賞では大事に乗り過ぎたせいで脚を余らせて負けてしまいました。馬は最高の状態で、絶対に負けたくないレースでしたので、本当に悔しかっ

たです。ステイヤーズSも、テイエムオペラオーに勝ち癖をつけようという意図があって参戦していたのですが、菊花賞にピークをあわせていた影響もあったのか負けてしまい…。自分が足を引っ張っているという感覚があり、落ち込みました。特に菊花賞は今でも悪夢として夢に出てくるほど。完全にトラウマになりましたね」

そんな悩める人馬が吹っ切れたきっかけになったのが、4連敗で挑んだ有馬記念だった。グラスワンダー・スペシャルウィークの二強対決とされていた一戦で、テイエムオペラオーは3着と好走。結果的には5連敗となったものの、同期のナリタトップロードらに先着する。古馬のトップと十分に渡り合えたという実感があった。

「ついに歯車が噛み合った」

そして年が明けて00年。テイエムオペラオーと和田騎手の伝説の快進撃が始まる。まずは京都記念でナリタトップロード、ステイゴールドらと激突。ナリタトップロードをクビ差で撃破した。「ついに歯車が噛み合った」という実感とともに「ああ、もう負けないんだな」とすら感じる勝利だったという。飼い葉をなかなか食べないなど、若い頃には不安定な面もあったテイエムオペラオーだが、そうした問題点を克服することで体調も上向き、調教もやりやすくなっていった。

「あの時期は、パドックでまたがる時に〝いつもの背中なら勝てるな〟と思っていました。逆に

不安なのは、当日まで。ドキドキしながらパドックの時間を待っていました。あの馬の背中は他の馬とは全然違うんですよ。滑らかで操縦性も高く、乗り役を煩わせる馬ではなかったですね」

オーナーから00年のレースを「全部勝て」という指令を受けていた和田騎手。自身も「全部勝たないと恩返しはできない、昨年の負けはチャラにならない」と、気持ちを追い込んでいった。

「一年中ずっとテイエムオペラオーのことばかりを考えていましたね。レースの1週間前からは、毎日同じ時間に起きて同じ時間に寝るという、時間割りに従った動きをしていました。経験が浅く技術も未熟だったので、規則正しい生活をしないとついていけないような気がしたんです」

テイエムオペラオーと和田騎手は、続く阪神大賞典、天皇賞・春を連勝。特に岩元調教師が一番勝ちたかったレースだという天皇賞・春は、久しぶりのＧＩ制覇にとどまらない、格別な喜びがあったという。宝塚記念ではメイショウドトウと運命の出会いを果たし、そこでも勝利。夏の放牧を挟んでも勢いは止まらず、京都大賞典と天皇賞・秋も勝利した。

「天皇賞・秋は、芝２０００ｍというポジション取りが難しい条件。前哨戦ではそこまで無理をしないこともありますが、ＧＩとなると全員が勝ちにきます。当然、周りも先輩ばかりですしね…。そこは引いたら負けだと思って強気でいきました。前年、菊花賞などで勝てなかった原因のひとつは、自分がギリギリのところで引いてしまっていたこと。あの敗戦と反省があったからこそ、天皇賞・秋という舞台で、先輩と後輩の関係を意識せずに強気で勝ちにいけたんだと思います」

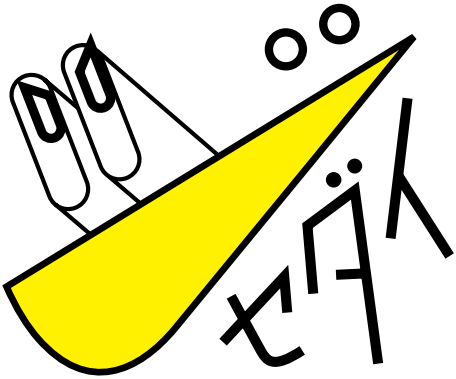
ここまででGIでの3勝を含む6連勝。絶対的な主役となったテイエムオペラオーと和田騎手が次に挑んだのは、翌月のジャパンCだった。ジャパンCは、外国人ジョッキーが多く参戦していた当時において、普段のレースとは異なる流れになることが多い、独特なレース。和田騎手も、その独特さがテイエムオペラオーの連勝をストップさせる危険性も感じていた。

「特にファンタスティックライトは当時、世界トップクラスの名馬。しかも鞍上は憧れていた世界一の名手デットーリ騎手です。それでもレースでは〝同じ人間や!〟と思って乗りました」

自身でも「全く余裕がない、崖の際に立たされているような毎日」と振り返る日々のなかで、自らをマインドコントロールする技術を会得していた。周りを意識しない、自分の仕事をするだけ…前年には菊花賞でベテラン勢に翻弄された若武者が、1年経ち、強い精神力を会得していた。結果は1着テイエムオペラオー、2着メイショウドトウ、3着ファンタスティックライト。世界の強豪を退けた。これで7連勝。次は年末の大一番、有馬記念が待っていた。

その瞬間、1頭ぶんだけ進路がひらいた

「有馬記念はある程度〝落とし穴〟があるだろうと予測してから挑んでいました。ご存じの通り難しいコースですが、1コーナーでみんな強気にポジションをとってきて、がっちり囲まれてしまいます。正直、レース中はずっと〝厳しいな〟と焦りながらの騎乗になってしまいました。結



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!